施設の改善

—施設研究大会に参加して—

清水桔梗

(一)

今更らしく幼稚園教育の目的をもちだすわけでもないと思いますが、施設設備を改善するについては、たえず幼稚園教育の目的を考えて、それに添って改善しなければならないと思います。ついては、いまいち度、幼稚園教育の目的を思い出してみようではありませんか。

学校教育法の第七十七条に、『幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。』と目的を規定してあります。

〝幼稚園は、幼児を保育し〟と極めて簡潔にまとめてありますが、これには重要な意義が含まれているものと思います。どんなふうに子どもを保育するかということが問題です。つまり経験の乏しい子ども、家庭というあたたかい家族集団のなかで、はぐくまれてきた子どもを、はじめて大勢の仲間のある集団、同じような要求を持っている集団の中で保育をすすめるのですから、よほど考慮しなければなりますまい。うっかりしていると、急に大勢の仲間同士のなかで生活するのですから、神経質になる心配があります。あるいは、思いがけない非道徳的なことを見習うかもしれません。こんななかにあって、将来の日本を背負って立つ子どもに育てるのですもの、〝幼児を保育し〟は、なみたいていではありません。そこでその方法として〝適当な環境を与えて〟と規定してあるのでしょう。環境といってもこれまた実に多方面にわたって考えなければなりますまい。必ず心を伸すための環境、身体の成長を助けるための環境とにわけて考えることができます。そしてその環境が、材料用具のような小さいものから、施設設備のような大きいものにいたるまでが配慮の対照となります。

環境を配慮するとは、いうまでもなく、〝その心身の発達を助長することを目的とする。〟と述べられてありますように、心身の発達を助長することのできる配慮をしなければならないことであります。

入園当初は珍らしいので、備え付けられてある施設設備のすべてに感心を持ちつづ

けますが、なれるにしたがって、おのずから興味のつづくものとつづかないものとができてまいります。興味のつづくものは、心身の発達に適合したもので、つづかないものは、程度のひくすぎるものか、高すぎるものであります。一例をあげますと、高さ一四〇センチメートルで斜面の長さ三〇〇センチメートル位のすべり台でしたら、一週間位は押すな押すなの盛況ですが、ぼつぼつ興味がうすらいできます。そんなとき、頂上に綱をつけて、その綱を持ってのぼれるように工夫しますと、子どもたちは、ちょうど登山でもしているような気分でのぼっていきます。しかも、幼い子どもの扁平足の矯正の役立ちにもなります。

このように設備されている運動具、あるいは建てものを幼稚園教育の目的にそって改善しなければならないと思います。

(二)

ダムの建設などがいちじるしく盛んになってきたので、頓に電力事情が全国的によくなってまいりました。そのため電気器具が出廻り、生活が都鄙をとわず明るく能率的になってまいりました。例を農村にとってみましても、農器具が機械化されましたし、台所には洗濯機が、座敷にはテレビがおかれるような文化生活がくりひろげられております。ところが、共同生活の場であり、地区の文化を推進しなければならない使命をになっている幼稚園や保育所が、相変らずテレビはおろか、ラジオ設備さえ未だしのところがかなりあると思います。

生活の水準が一般に高くなって、農漁村でもどんどん文化的に進んできているのでありますから、何はおいても幼稚園や保育所が進歩的な、啓蒙の意味も含めて施設設備を改善していかなければならないと思います。

改善にあたっては、いうまでもなく、子どもの成長発達をたすけ、安全な生活のできるものにしなければならないことは論をまつまでもないと思います。

近頃、近代感覚のすぐれたすばらしい幼稚園や保育所が、あまた新築、あるいは改築されて、それぞれの地域にデビューしてまいりました。ところが、上から下までガラス張りの障子があったり、明るさを取り入れるために、大きい窓ができたりしていますが、考えなければならない点があるのではないでしょうか。

さしあたり、一面にガラスのはいった障子だとすると、どうしても子どもの生活が制限されましょう。ボールをなげてはガラスがわれないか、おしくらまんじゅうをしては破れないかと、子どもも教師もたえずはらはらしなければなりません。また、窓が大きくて、子どもの臍より下に窓の敷居が、万が一にもありましたら、身体の上部に重心のある子どもは窓のそばに行くたびに危険な状態になることは必定です。一人の教師が大勢の子どもをあずかるのですから、なるべく危険のない安全な生活の場にして保育しなければ、教師の気分も落ちつかないと思います。ここに新感覚の建築をしたり、改築をしたり、改善をしたりする場合に、考慮を払わなければならない点が多々あると思います。

(三)

子どもの安全と施設設備とは大いに関係のあることで、教師はとくに配慮しなければならないと思います。例えば、集団生活で一番教師が心配するのは、地震の時でしょう。台風も心配、火災もたいへんでしょうけれども、地震ほどではないでしょう。

都会の幼稚園は土一升金一斗というほど地価の高いところに経営されているのですから、思いきり広く敷地をとることができません。都心に近づくにしたがって、二階だての園舎が多くあります。こんな時、地震がひとゆれゆれでもしようものなら、とても混雑して避難に骨が折れます。そんな時、階段に避難用のすべり台が設備されていると、四十人のクラスなら四十六七秒で階段をおりることができます。まったく驚異的な速さで避難することができるのです。

だんだん新しい施設がうまれてきますと、子どもたちは下ばきのままで遊園や保育室にいききしていたのが、保育室の前ではきものをぬがなければならないようになってまいります。それは保育面が広くなってとてもよいのですけれども、一朝非常の場合には、靴をはいている時間が惜しいのに、子どもは校舎が倒れそうになっていても、平気で自分のはきものを探しもとめます。

ずいぶん昔のことになりますが、京阪神地方をおそった世界的な台風—室戸台風—の時は、大きい建てものが倒壊しました。とりわけ学校が数多く倒れました。そしていたいけな子どもがその建てものの下で犠牲になりましたが、自分の持ちもの、はきものをとりに行ったために、尊い生命を失ったというのがかなりありましたようです。

このことを思うにつけ、下ばきをぬいで保育室に出入りする幼稚園の多くなったことを悲しみます。幼稚園を清潔にし、保育面を広くするということはとても大切なことですけれども、子どもの生命にはかえられないと思います。施設の改善には、このへんを子ども本位に考えたいと思います。

それには、園舎のどこか一隅を必ず頑丈な鉄筋建築にする必要があると思います。過日〇〇市方面へ視察旅行に出かけて、その地域の幼稚園にお邪魔いたしましたが、建てもの全体が鉄筋の独立園舎でした。しかもその経費の全額を教育委員会が負担しているときいてうらやましく思いました。より幼い人間の生命を大切にするということが、地域をあげてわかっておられるのだと思いました。

(四)

最近ある大学の正門が改装されました。門前を通って勤めにでていく人々が、期せずして、異口同音に「まるで刑務所のような感じになってしまった。木造の扉のこわれかかっているのもあまりよくないが、がっちりとライオンのおりのような防撓でできたのは、まったく学生を囚人に見たてたように思える。感じがよくない。」とこもごも語りながら通っているのをききましたが、その通りであります。相当な経費をかけて改装しながら、前より悪い感じのものになったのは残念でした。大学ばかりでは

ありません。高等学校、中学校、小学校、幼稚園にいたるまで、気持のよい明るい施設設備に改善したいものです。また改善したことによって、罪人ができたり怪我人ができたりしないように設計したいものです。

ある小学校がやはり門を新しく木造で造りました。頑丈な門です。少々登っても大丈夫という門です。門が丈夫になると小学校の子どもは安心感を持つのでしょう。門のとざされたあと家に帰る時、校務員室まで行ってたのんで門をあけてもらうのが面倒なのか、数人の子どもは、横木を足かけにして門のなかから門の外に出て来ました。私はおどろいてしばらく眺めていましたが、門が丈夫になったので、安定した気分で上って来たようです。勿論門がしまっていたら、校務員室まであけてもらいにいくのが当然ですけれども、平気で乗りこえをするのです。子ども自身の判断力も足りませんが、施設の改善のおかげもあると思います。

このように、改善したために感じが悪くなったり、悪用されたりしないですむようにありたいものです。

(五)

施設研究大会が発足して六年たちましたが、施設設備の改善のために、あるいは保育の進展のためにまことに役立つよい会合であったと思いました。けれども大会を持つ地方はとてもたいへんなことでした。正会員が少なくて、当日の会員に期待をかけるという運営の仕方ではとても不健全だと思いました。正会員が少なければ少ないように、あまり大きい会合にしようと望まないで、落ちついて静かに、真剣に研究のできる雰囲気をかもすような会にすればよいと思います。

私は、今年はじめて施設研究大会に参加したのでありますが、研究発表に、協議会に、なかなか参考になる事柄がたくさんありました。

大会で数々発表されたものを参考にして、帰ってから着々新しい施設を充実しておられる幼稚園や保育所が、いくつかあることと思います。いつの場合にでも、私どもの設計するのは教育の場をするので、決してホテルや文化会館を設計するのではないということを、頭におきたいと思います。必要以上に華美になることをさけ、気分が落ちつかないような色調にすることはやめたいものです。明るく朗かではありたいのですが、もしかして落ちつかなかったら、禍根を子どもの生涯に及ぼすことになりますので、注意したいと思います。

要は、施設が保育をすすめるのでなくて、やはり教師が保育をすすめるのであることを自覚したいと思います。

金殿玉楼のように立派な園舎が建っても、そのために子どもの自由が束縛されたり、活動に制限が加えられては気の毒です。万一そんなことにでもなったら、青天井で保育する方がはるかに効果的だということになります。施設に使われて遊ばせるのでなくて、施設をうまく使って遊ばせるようにしたいものです。

(大阪市立大宝幼稚園長)